

相一致し、内外共に心を同じくした爲め、国力は内に充實し、武威は外に宣揚してからに、よく百戦百勝の功を奏したものは、豈に深仁と、聖徳の致せし所ではあるまいか、

第八十六課

記旅順海戦

其一

土屋 弘

○撃沈づむる、○并呑のむ、○尊俎の器、俎はつくろにて、牲を載する物なり、○折衝の上にて、かけひき進退するを云ふ、○方略、策略、○部署する、○統帯帶させる、○節度する、○舳艫へさきを云ふ、○備不虞、おもはざる所から、おもはざる事、○四

願悔冥らやみてあるとの心、○胃進にすむ、○摧殘、くだげそ

講義 明治三十七年二月八日の夜に、我が驅逐艇隊が露國艦隊を旅順港外に襲ひ、其の三大艦を破りた、九日には、其の三隻を仁川港に撃沈した、是れより先きのことじや、露國は滿洲を并呑せんとするの志があつた、我が日本では早くから之れを察知し、尊俎の間に於いて、折衝すること半歳の久しきに及んだが、協議が終に不調となつてしまつた、二月五日に、書を贈りて國交の斷絶を示めし、急に令を聯合艦隊司令長官東郷平八郎に傳へ、露國の軍艦を攻撃させた、司令長官東郷平八郎は、諸艦長を會合させ、攻撃の方法策略を協議して部署を定め、少將梨羽時起

をして一等戦艦朝日、三笠、初瀬、敷島、富士、八島の六隻を統帯せしめ、此れを第一艦隊となした、少將出羽重遠をして、巡洋艦千歳、高砂、笠置、吉野の四隻を統帯せしめ、此れを第二艦隊となした、中將東郷平八郎が之れを節度するゝとなつて居る、少將三須宗太郎は、装甲巡洋艦出雲、磐手、吾妻、八雲、淺間、常盤の六隻を統帯し、此れを第三艦隊となし、少將瓜生外吉は、巡洋艦浪速、高千穂、須磨、明石の四隻を統帯し、此れを第四艦隊とした、そうして中將上村彦之丞が、之れを節度するのである、その他、砲艦、水雷、驅逐艇等、舢舨相銜くんで、佐世保港を出發し、朝鮮海にあつまるもの、すべて五十餘隻に及んだ、

明石艦來り報じて曰く、敵艦の大部分は、旅順港外に在る、而して和利也阿久、胡例都の二艦は、別に仁川港に停泊せりと、是に於いて第四艦隊を遣はし、陸兵を護りて仁川に向はしめた、東郷長官は、自から第一、第二、第三の艦隊を帥ひ、驅逐艇を左右にして不虞に備へ、以て旅順に向つた、そうして敵の商船露西亞號の來るにあい、龍田艦をして之れを捕へしめ、又敵の汽船滿洲號を獲た、衆相慶賀して曰ふ、露西亞と滿洲は、己に我が手に落ちたり、何のよろこびが之れに若かんと、此れを入日の出來事とする、

既にして夜となつた、驅逐艇隊第一、第二、第三をして旅順に向はしめ、

第四、第五をして大連に向はしめた、是れより先き、敵艦陣を整へ、水雷驅逐艦十三隻を其の前に列し、以て我が艦隊の衣襲に備へて居る、夜も己に深更となりて、四方をかへりみるにまつくらやみじや、我が驅逐隊十八艇は、直ちに進みて港口に達した、敵は探海燈を照らし、我が航路を妨げんとしたけれども、我が軍隊は冒進して、だんくくと相接近するに及び、各艇皆水雷を發し、敵の三大艦にあてた、曰く列斗宇威山、曰く都惠坐禮宇遠知、曰く波留羅陀の三隻である、しかし此の四隻は、皆破摧敗殘して、用に堪へぬと云ふことじやと云ふ、此の夜我が本艦隊は、跡をくらし立て立ち去り、敵をして其の所在を知らしめざりしと云ふことだ。

第八十七課

記旅順海戰

其二

土屋弘

○味爽あじさけ夜の明けが、○敵狀てきじやう敵の狀態、○有間ありまあいまがあ、○單縱陣たんじゆうじんひとへで、たてに長
午天ごてん正午の天、○綽しやく然して居る貌、○不虛發ふこせふ無駄に發射、○隱々いんいん雷のゆるくと、お
いくいくこゑ、○鞆たづ々と遠くきこゆるを云ふ、○四射ししつ四方を、○稀突きつこの如く、突進つしんきた
るを、○整齊せいせいちやんと、とののい、○來泊らいはくきたりて、○恐懼おそおそれお、○朔風さくふうかぜ、○星斗せいとう
云ふ、○北斗ほし七しち星せいを云ふ、○尾行びかうけてゆく、○決雌雄けつせいゆうをかちまけ、○無算むさん出來ぬ程との心、

講義 九日の味爽に、第三艦隊をして敵の状態を視はしめた、しばらくありて、無線電信にて報じて曰ふ、砲撃すべきである、是に於いて戦艦三隊を合して單縦陣をつくらせ、港の東より西に向つて進んだ、時に正に正午の天であつた、敵艦は砲火をひらいて砲撃した、黄金、老鐵諸山の砲臺も、亦發砲して我を撃つのだ、我が艦隊は倅然とかまへて之れに應じ、決してむなしく發彈せぬやうにした、既にして兩軍の砲彈海中に交はり、潮水は立ちあがり、波浪は怒り狂ひて、隠々轉々として、電光が四射してものすごい、たまく敵の巡洋艦一隻、猝突し來りて我が艦を犯した、我が諸艦は砲をあつめて之れを砲撃したので、

(202)

輒ち逃げ去りた、我が艦隊は整齊として更らに紊ることなく、始めから終はりまで、一の如くにかまへて居る、午後四時に至りてた、かひを止めた、敵の一等戦艦杜留多和、巡洋艦泥彌奈、亞須古流度、農留宇逸苦の四隻をさすづつけた、而して我が死者は四人で、傷者は二十八人であつたが、敵の死傷は六十六人あつたと云ふことじや、瓜生少將の仁川に向ふや、八日の午前九時に、仁川港口に達した、時に英、米、佛、伊諸國の軍艦仁川に來泊して居た、我が艦隊之れに向ひ、禮砲を發射した、露艦は恐懼して、遁走せんことを圖れるものゝやうであつたが、已にして夜になると、北風波浪を弄して、星斗が凍らんと欲

(203)

するばかりじや、敵は果して港外に逸せんとしたから、我水雷艇をして尾行せしめた、彼は砲火を開らさ、敵意を示めしたが、竟に港口を出て去ることは出来なんだ、是に於いて各國の艦長及び領事に告げて曰ふ、我將さに露艦と事あらんとするのじや、幸に之れを避けて、彈丸の及ばざる所に去れと、

又敵の艦長に通牒して曰ふ、昨夜貴艦は、己に戦ひを挑まれたり、請ふ明日九時より正午に至る間を以て、雌雄を決定せんと、約束の期に至れば、敵は月尾島の西に出て、先づ我に向つて發砲した、我が千代田艦は之れに應職すること三十五分に及んで、敵の二艦は皆傷

退いて港中に入つた、胡例都は自から爆發して亡び、和利彌阿久及び、汽船寸我利は、共に破れて沈んでしまつた、敵の死傷は算なき程澤山ありしに、我には一人の死傷者もなかつた、

第八十八課 乃木大將與ニ斯鐵瑟兒會見

○尊組相見をのせるもの、酒席の間において相見ゆるを云ふ、○榮幸やと云ふ心、○敵風彈雨之餘砲玉は、風の吹くやうに吹きまはり、鐵、○恩詔みことのり、○加禮加へて厚遇す、○厚誼義理、○惋惜おしくもあるの意、○新駿駿馬を云ふ、○舊愛馬との心、○令子がの心、○陣歿所にて死せりの意、○若得所矣やうであるとの心、○戚いた心を

の心、○合撮うつすを云ふ、

【講義】 明治三十八年一月一日に、旅順が降伏した、越へて四日に、乃木大將と、露の總督斯鐵瑟兒と、水師營に於いて會見した、大將先づ之れに語りて曰ふ、今は兩國兵を用ゆるを強めて、貴將軍と尊俎の間に相見るを得たは、何の榮幸が之れに如かんやと、總督曰ふ、礮風彈雨の餘に於いて、誠に自から意はざりき、將軍をこゝに見ることを得んとは、且つ喜ばしくも思ひ、且つ愧づかしくも思はるゝ、猥りに貴國大皇帝の恩詔を蒙り、亦貴將軍の加禮を辱けなくす、此の心尤も感なき能はざる所である、又曰く、吾に亞刺伯産の駿馬が一匹ある、願くは貴將軍

に獻せんと、乃木大將曰く、將軍の厚誼を謝す、當さに委員をして將軍のたまものを拜せしむべきである、抑も予は嘗て泡子崖に於いて、愛馬を喪つてしまい、今に至るまで惋惜して心に忘れかねて居る、今貴將軍は愛馬を以て、予に贈くりたまはんとす、予はあたらしく駿馬を得、貴將軍はもとの愛馬を失はることゝなる、うたゝ將軍のために之れを悲しまざるを得ずと、斯總督曰く、聞く南山の役に於いて、令子陣歿されしと、予竊かに將軍のために之れを悼むと、乃木大將曰ふ、否々、予はただ二子のみなりしに、長子は南山に戦死し、次子は爾靈山に戦死せり、是れ共に死所を得たるが如し、予又何の悲しむ所かあらんと、斯總督歎

じて曰ふ、忠臣と孝子が、一門より出てたのである、將軍は二愛子を殺はれても、以ていたみとして居られぬ、天下に未だ嘗て、將軍の如き人あるを見たことはない、將さに別れんとした時、斯總督の從卒が、一匹の駿馬を牽いて來た、斯鐵瑟兒は身をおどらして鞍にまたがり、乃木大將を顧みて曰ふ、獻せんと欲する所の馬は、實に此の馬であると、既にして馬を下り、一所に寫眞を取りて、以て別意を表して立ち去りた、

第八十九課

梅谿遊記

其一 齋藤正謙

○天下絶勝の勝地なりとの心、○東廐のすみ、○幽僻たよりて居る、○罕ニ造觀者一

ゆきて見物するものが、○伊人國人、○封疆境域、○全伊半勢伊勢の國は全に、○城至りてまれじやの意、○他封封邑、○我治下醒した、○舊志記録、○伊人道はと云ふ心、道は和の二國、○豪強相奪に奪ひあいての心、○清絶と此の上なしと云ふ心、○和之宇陀の宇訓ず、○伊之名張名張郡、○危峰層巖かさなりあふてる岩石、○簇々りあふ、○錯立まじりて立つ、○點綴はせる、○爲レ導をみる、○未下つさかりを云ふ、○入ニ佳境一きのよき所に入、○躍然がる貌、○遍地皆花皆花じやと云ふ心、○花期く時期、○心降と云ふ心、

何づれの土地にも梅のない所はない、何づれの郷里にも山水のない所はない、ただ大和の國の梅溪ばかりは、花は山水を挟みて奇異な所

があるし、山水は花を得て美麗に見ゆるのじや、實に天下の絶勝の地とするのである。されど土地は州の東阪にあるので、頗ぶる幽僻である、もと往いて觀るものが罕なため、名が甚だ世にあらはれなんだ、そうしてあらはれるやうになつたのは、我が伊賀の人より始まつたのである、溪の傍らに、梅を種へて職業として居るものが、凡そ十ヶ村ある、石打と曰ひ、尾山と曰ひ、長引と曰ひ、桃野と曰ひ、月瀬と曰ひ、嵩と曰ひ、瀬瀬と曰ひ、廣瀬と曰ふ、此の八ヶ村は、大和の國に屬して居る、それから白樫と曰ひ、治田と曰ふ二村は、伊賀の國に屬して居る、我が上野城の南方三里ばかりの所にある、我が藩の封疆は、伊賀の全部に、伊勢

の半分を除く外に、又山城大和の田地五萬石ある、其の田地は梅溪を環りて居る、而して梅を種へて居る村は、多く他藩の封邑に屬して居るのだ、其の内ひとり大和の廣瀬と嵩村の二村、伊賀の白樫、治田のみは、我が支配下になつて居るのじや、されど舊志を按ずるに、月瀬の諸村は、多く伊賀の方に屬して居る、伊賀の人は言ふ、戰國の際に、豪族と強家と互いに相奪ひ合ひ、遂に今日のやうになつたのであるが、此の地始めは大和に屬せりと、今其の地勢を審らかにするに、上野城に近くして、山脈も相通じ居る、道理上固よりそんなことであらう、だから大和人の來ることは常に少なくして、四五十年來伊賀の人のみ、常に往きて觀

て居る、溪の勝地は、是に於いてあらはれたのである、(注意) 始は和に
屬せりの和は、伊の字にあらざるか、然らざれば語をなすと思ふ、
此の十ヶ村の梅は、幾萬株あるか其の数が分からぬ程じや、されど盡く
谿に臨んでは居らぬ、溪に臨んでるものは、最も清絶として居る、谿は
水源を大和の宇陀郡から發し、伊賀の吉張郡を歴て、こゝに到るのじや、
廣さ殆んど百歩ばかりある、尾山村は其の北岸にある、嵩、月瀬、桃野
は其の南岸にある、危峰層巖は、簇々として其の間に錯出し、梅は之れ
が經を爲して、松は之れが緯をなして居る、そうして水竹は之れを點綴
して居るのだ、

余は伊勢の津城に住んで居る、梅溪を距ること殆んど二日程ある、久し
くこゝに遊ばんことを願ふて居たが、未だ遊ぶことが出来ずに居る、庚
寅の二月十八日に、宮崎子達、子淵、山下直介と共に伊賀に如き、遂に
月瀬に往きて遊ぶことゝなつた、上野の衣服部文稼、深井士發等、之れ
が道案内者となつた、美濃の梁川公園、及び其の妻張氏、遠江の福田半
香も、亦來會した、ひつじさがりに城門を出て、行くこと一里餘にして、
白樫村となる、山谷の間に已に梅花が多くなつた、そうしてだんく佳
境に入るのだ、又半里弱にして、石打村となる、又行くこと未だ一里な
らずして、尾山が目の中であり、之れがために躍然となつた、至りて見

れば遍地皆花である、余は初めは開花の時期に違はんことを恐れて居たが、之れを見て安心した、入りて三學院に休憩し、一宿を約して立ち出て、往きて一目千本と云ふ所を見た、梅溪の賞は、是れから始まるのである、

第九十課

梅谿遊記

其二 齋藤正謙

○一目千本が見ゆるの意、○前崖がけ、○佳絶うつくし、○詰曲てまがる、○籟と訓じ、蹠の字におなじ、○下顧方をみれば、○彌望晴然まつしるじや、○輝映きてうつりあふ、○寥々との心、○熱鬧やうなさはぎ、○峻峰みれば、○寒溪かなるたに、○斂

れどき、○淡烟中のうち、○依約つく、○暗香花のかほり、○菴薪花のかほりのさ、○咫尺た所を云ふ

講義 一目千本は、尾山入谷の一である、花は最も多き所であるから、

此の名があるのだ、蓋し芳野の櫻谷に比して云ふのじやそうだ、余は同人等と、三學院を出て、前のがけを下れば、山水と梅花と、皆己に佳絶であるを覺へた、意にまかせて行きて、一の大谷に至りつけば、文稼は識つて居て之れを言ふた、こみちが、行きつまりて又曲りて上りた、花が之れを夾さんて居る、歩いて其の間に出づれば、白雲を足の下にふんで、歩行するやうであつた、五六百歩にして山巔に達して下願す

れば、見わたすかぎり皆まつしろにして、露山と相かゝりやまてうつりあふて居る。

余嘗て芳野に遊んで、其の一目千本と云ふのを見たが、此所の盛かんな所があるけれども、此所のすぐれたけしきがない、又嘗て嵐山の櫻花を見たが、此所のすぐれたけしきがあるけれども、此所のさかんな所かなくなつた、更らに之れを西土乃ち支那國に求むれば、梅花を以て名高きものは、杭州の孤山である、境域は蓋し幽なるも、花は即ち寥々としてさびしい、又蘇州の鄭尉は、花は頗ぶる許多なるも、土地は即ち熱鬧で困まる、ただ羅浮山の梅花村は、峻峯と相對し、寒溪に臨んでからに、

花は尤も澤山ある、こひねがはくは、我が梅谿に比較することが出来るであらうか、日が已に黄昏となり、花は淡烟の中にかくれ去り、千樹は依約として、其の極まる所を見ぬ、されど暗香は翳翳として、人をおそひきて、溪聲の益々近くして且つ大なるを聞くばかりじゃ、咫尺も色を辨せざるに至りて、而る後立ち去りた、

第九十一課 梅谿遊記 其三 齋藤正謙

○昏黒く日がくれて、○想する、○開謝は花ひらくを云ひ、○虧盈は、月のかけるを云ふ、○翻語を云ふ、○盛開ひらく、○離披は、はなるを云ひ、離散と云ふに似たり、○爛漫

花のもゆるが如く、○望後三日三日なれば、十五日を云ふ、十五日後、
満開するを云ふ、○望後三日三日なれば、十八日を云ふ、
○ 々々る貌、○ 負荷たり、
になはせ、○ 傾覆つがへす、○ 悵 悵うらむ、○ 村酒さげ、○ 醺然さまを云ふ、○ 吟咏
たりする、○ 揮灑揮灑は、詩歌をうたふを云ひ、○ 愁悶だゆる、○ 小奚つかいを云ふ、○ 驚喜よろこぶ、
○ 清朗がらか、○ 玲瓏透徹すきとほりて見ゆる、○ 横斜めに見ゆる、○ 寶鈿のいからも
し、○ 玉釵んさし、○ 錯落おつるさまを云ふ、○ 鏘 然がる、音を形容して云ふ、○ 銀鱗
銀色のうろこにて、月光のさび、○ 蕪に入ると云ふ、○ 隱約くかと云ふ心、うす
なみにうつるを形容して云ふ、

【讀義】 たそがれ時に還り來て三學院に入つた、月の昇るを俟つて、復
た出て、花を觀んとするのである、余平生梅溪の月夜の奇をおもいやり、
一度の遊びに之れを併はせ見んことを欲し、毎年春に、人が伊賀から

くるものがあれば、輒ち之れを詢ふたに、花の開謝する時と、月の虧盈
する時と、いつもくいちがひて、相合ふことはない、之れを待つこと七
八年の久しきに及び、今年に至り、今月の十五日前を以て、梅溪に來ら
んとしたのじゃ、されど土地の山中にあるを以て、花をつくることが取
り分けておそいだらう、其の盛開は常に春分の前五六日の所にあると云
ふことじゃ、而して春分は、今月の末にあれば、其の月のなさを如何ん
ともすることは出來ぬ、そこで忽ち思い出したは、邵康節の詩である、
其の詩に云ふ、花を看るならば、切に戒めて花の離披する時を見てはな
らぬと、それにつき私に思ふやう、花の半開に至れるを見れば、よいて

はないか、何にも其の爛漫たる時期を待つ必要はないと、遂に十五日後三日を以て、當地に來たのである、豈に意はんや花の開らくこと己に七八分、或は將さに十分ならんとせんとは、實に望外の喜びであつた、ひとり日己に落ちて、黒雲の天を覆へるを如何んともされなんだ、それがために意が殊に悵々たるを覺へた、そこで燭を張りて一盃を傾むけんとした、此度のあそびに、樽の五升を入れるものを購ひ、酒を一杯になる程貯へ、奴に命じて之れを負擔せしめて來た、呼びよせて之れを受け取り、酌むこと五六巡ならずして、最早つきてしまつた、怪みて之れを詰問すれば、乃ち奴のやつが酔ひて地におとし、傾覆を致した故と云ふこ

どが知れた、益々帳恨に耐へなんだ、それから村酒を買ひて數升を得て來た、盞を洗ひて更らに酌み直したが、甜くして口に適はぬけれども、亦自から醺然と酔ふた、文稼は風流の士じや、公圖は詩を以て海内に名ある人じや、而して半香は善く山水を畫くものである、其の餘の人々も、亦皆吟咏揮灑する人々であつたから、少しく愁悶を慰さめた、俄かにして小奚が來り報じて曰ふ、雲が破れて月が出たと、衆人は驚喜して、狂せんとする程であつた、そこで盞を捨て、走り出て見れば、時は將さに二更ならんとする頃であつた、月色は殊の外清朗である、歩して眞福寺に抵れば、一枝く月を帯びて、玲瓏透徹し、其の影は盡く横斜してか

らに、寶釧玉釵は、錯落として地に満ちて居る、そして水は其の下を流
れ、鏘然として金石の如き聲をして居る、眞に人間界にあらざることを
覺へた、岸に傍ひて西に行けば、前に月瀬を望み見る、水の清きことは、
寒玉のやうて、水上に月影をたゞよはし、蹙りて銀鱗をなして居る、而
して兩山の花は、倒まに其の上にはたされ、隱約として見ることが出来
る、一たび中流に棹させば、山水は俱に動搖するのじや、吾が平生の願
ひは、是に至りて酬ゆることを得たと云ふべきじや、

第九十二課 保險

清國國文教科書

○自 贍 ぎはすやうにする、○無形之資本いもとて、○適當之業はまつた事業、
○災害損害、○水火火災、○推陷貧乏になるを云ふ、○掃蕩一文なしとなる、○積
貯之法いておく方法、○代保て保證する、○償 額ふたか、○遭 險之難易遇する程
度と、○有 三不測一不幸あらばと云ふ心、

【講義】 人の此の世に生れ出づるや、必らず一ツの事業を営みて、以て自
から生計を爲さねばならぬ、而して營業には、必らず資本と云ふものが
ある、有形の資本は、貨物及び、宮室器具是れてある、無形の資本は、
勞力及び精神是れてある、此の資本がありて、之れを適當の業に用ふれ
ば、終身安樂するもよろしいのじや、

されど人事既に盡くせども、災厄や損害は、測らざる所から生じてくる。時にして水火の厄災があり、時にして死亡の不幸がある、そうして往々吾が資本をあげて、之れを摧陷したり、掃蕩したりすれば、如何なる心地かする、是に於いて積貯の法が生出するのだ、されど非常の事は、預じめ計ることは出来ぬ、若し積み貯ふる所多きことなくして、災害が己に至りたならば、如何にするか、是に於いて平保險の方法があるのじや、保險とは、衆人の危険を代保する所である、其の法は、保險する所の價値を計り、以て償額となして、其の危険に遭ふの程度に因りて、時を以て若干分の費を納れしめ、若し不測の災害にあふことあれば、其の人の

納れる所が、幾何もなくとも、亦必らず約束の数の如く、之れを償ふてやるのである。

第九十三課 時辰鐘 蔣 維 喬

○困倦こんげんつかれ ○簡易かんえいと云ふ心、無 ○太古たごの世よの時とき ○漸ぜん珍ちんになつてきた ○堅たて表へつて、時間じかんを知るの方法はうほうを云ふ ○製せい漏ろうるを計かつて、時間じかんを知る法はう ○嚴守げんしゅまもる、
○臥起ふしききたり ○作輟さくてつやめたり ○生計せいけい荒矣すまひ生活せいかつのみちが荒廢くわい ○遊讌ゆうえんのしむ ○過くわ從同遊じゅうどう同伴どうはんするを云ふ ○久待きうたいくまづ ○積習せきじゅうりし習慣じかん ○文化ぶんか之高かう下度かたのたかひくと云ふ

講義 文化の未だ開らけざりし時は、日の出づるを觀て晨を知り、日の入るを觀て夜を知り、花開らきて春を知り、葉落ちて秋を知り、飢ゆれば食ひ、渴すれば飲み、困倦すれば睡むると云ふありさまで、其の事は簡易で、其の時はひまであつた、謂ゆる太古の世であるのじや、文化はだん／＼と開らけ、事がだん／＼繁くなりて、時も亦漸やく珍重されるやうになつた、是に於いて表を豎て、日の影を測かり、漏を製して時刻を記するやうになりて、人が乃ち時を按じて事を作すことを得、規則も亦や、備具してきた、時辰鐘が出てしより、其の製が益々精しくなり、其の時が益々準になつた、一日を分けて二十四點鐘となし、鐘ごとに六

十分がある、分に六十と秒がある、蓋し文明の世となりて、人事がいよく繁げくなつた、故に分時がいよくこまかになつたのじや、吾國くに、英國人は最も時刻を重んじ、凡そ一舉でも一動でも、規定の時刻をさびしく守らぬものはない、故に功を成すことが既に多くて、精力が少しも疲れぬと、我が國はそうではない、飲食でも臥起でも、おほむね定時と云ふものはない、而して家事は續亂するのじや、業を操り職に就くにも、作輟に常なく、而して生計は荒廢するのじや、此の外遊議の如き會集の如きも、又親朋の相過從する如きも、期の如くに至るものはない、そうして人をして久しく待つ間に困却せしむるのだ、積習相沿りて、

幾んど時刻の何んの用をなす者たるかを知らぬやうじや、嗚呼、時辰鐘は一小器である、器を用ふるの人を見て、以て文化の高下を覘ふべしと云ふは、道理あることばである、

第九十四課

陶侃勵志

小

學

○百 璧かめ、○齋外 書齋の、○過爾 過すことなくし、○優逸 遊優逸居せ、○聰敏 聰明に捷なり、○吏職 役人なる、○愛好 愛しむ、○危坐 坐すはしく、○閩外 多事 閩の外に事件多しの絶へざ、○千緒 萬端のほしくと云ふ心、○遺漏 もらしたり、○中原 支那帝國のまんなるを云ふ、○遠近 書疏 所からくる手紙を云ふ、○手答 手づからこ、○筆翰 筆がみをかき、○壅滯 壅滞さ

○引接 應接する、○疏遠 とほしくしき人、○停客 客をなしくといま、○逸遊 居てこぼる、○荒 酔 酔ひれる、○自棄 自らをすてしまふ、

陶侃

陶侃は、廣州の刺史となつた、州にありて用事がなければ、輒ち

朝に百璧を齋外に運び出し、暮に又齋内に運び入れて居る、人が其の故を問へば、答へて曰ふ、吾方さに力を中原に致さんとして居る、過爾として遊優逸居して居ては、恐らくは事に臨んで用に耐へぬであらうと、其の志を勵み力を勤めたるは、皆此の類であつた、後に荊州の刺史となつた、侃は聰明にして敏捷で、役人たる職務に勤めて居ても、うやうやしくして禮節に近づき、人倫を愛好して、更らに倦むことなく、終日

膝をおさめて危坐し、決して怠惰の風を爲すことはなかつた。此の時は
閩外多事にして、千緒萬端なる用事の襲ひさしことあるも、更らに遺漏
するやうなことはなかつた。遠近からくる書疏は、すべて手づから答書
をかゝぬことなく、手紙をかくことの迅速なるは、まるで流るゝやうて
あつた。未だ普て一日でも、用務を壅滯させることがなかつた。又疏遠
なる人までも引接して、門内に停客あらしめたことなく、常に人に語り
て曰ふ、大禹は聖人であるのに、乃ち寸陰を惜しんで居られた、衆人の
如きに至りては、當さに分陰を惜しむべきである、豈に逸居荒醉すべけ
んやじや、生きて時に益することなく、死して後日に聞ゆるなきは、是

れ自から棄つるのであると。

明治四十四年四月五日印刷
明治四十四年四月十日發行

藤部氏漢文卷二

定價金拾八錢

不許複製
著作權所有

著作著 河村 定 靜

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

求 光 閣 書 店

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

發行所 服部 喜太郎

電話京橋二二二九番 振替東京一六〇九番

賣捌 全國 各書籍店

東京市芝區田太左衛門町七番地

印刷者 天沼 米三

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地

印刷所 製英舎印刷所

東京商工中學校教諭
北川博愛先生著

高等作文教範

洋裝新形十五美
郵定稅金四十五錢

東京商工中學校教諭
北川博愛先生著

活る書翰文教範

洋裝新形十美
郵定稅金四十五錢

坂井松梁先生著

ボケツト漢文と候文

洋裝新形十美
郵定稅金四十五錢

谷口流篤先生著

童子教三教講話

洋裝新形十美
郵定稅金四十五錢

谷口流篤先生著

三字經講話

洋裝新形十美
郵定稅金四十五錢

鹽入麗翠著

名識 開發 青年寶典

樂鷹標士著

青年 立志 修身百話

橋本邦助辻永共著

洋画 一斑

大和田胤修標註

標註 四書讀本

白井秀達訓點

獨學 十八史畧 片カナ付

郵定價製 税金四 四三六 十判 錢錢形

郵定價製 税金四 四三六 十判 錢錢形

郵定價製 税金四 四卅六 五判 錢錢形

郵定價裝 税金金 菊 四廿 判 錢錢形

郵定價製 税金四 六 八四 十 五 版 錢錢形

東京商工 中學校教諭 北川博愛先生著

師範學校 中學 高等女學校

作文教範

◎體裁總クローズ 金文字入頗美本 ◎定價金參拾錢 (郵稅四錢)

學生諸君が理想の作文書は彌よ生れ出てたり、作文の好同伴とし良師友として此の一書の右に出づるものは未だ是れなし。本書は編者が多年中等教育に従事し實地に教授せられし材料を基礎とし、これに有益にして、趣味深き大家の文を蒐集せるものなれば作文を學習せんとするには無上の好模範たり、且つポケット入りなれば携帯にも便利なり。

◎外に高等作文教範◎活きたる書翰文教範の近著あり

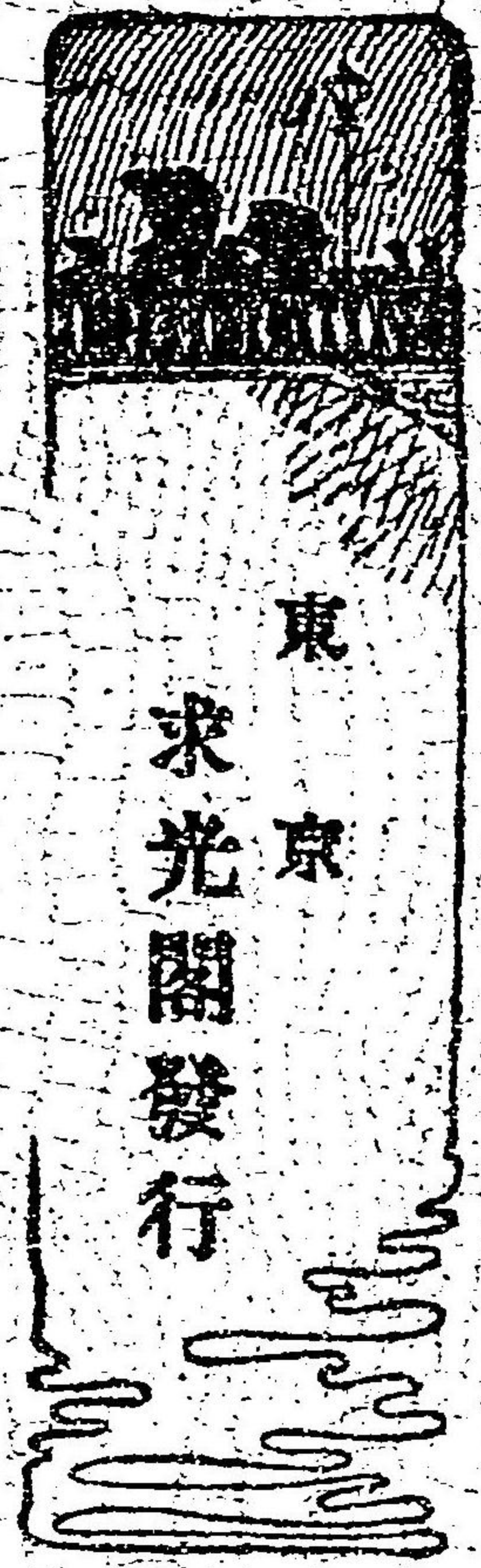
266
151

吉田 頼吉 先生 著

學生 必携 **文則と文例**

洋裝 新形 美本
定價 金卅五錢 郵稅 金四錢

文を上手に綴るには文則と文例を知らなくてはならぬ文則を辨へずして文を綴らば其文は散漫に陥る文例を味はずして文を作らば其文は統一を欠く本書は之が指導の任に當り
巻首の資料として編纂したるもの文を學ばんとする者には眞の寶典である



東京

求光閣發行